

維持血液透析における心血管疾患死に対する長期貧血のリスク

平野 一 村田 敏晃 斉藤 喬雄

福岡大学医学部腎臓・膠原病内科学

要旨：福岡大学病院血液浄化療法センターおよびその関連施設において維持血液透析を受けていた20歳から74歳までの患者201名（男性136名，女性65名，平均年齢59.5歳）を対象に，観察開始時から各月までの累積ヘモグロビン（Hb）値を計算し，2年間にわたる心臓血管疾患による死亡すなわち心血管死（cardiovascular death, CVD）との関連を検討した．また，その観察期間におけるエリスロポエチンの投与量との検討も行った．その結果，6か月以上にわたる低 Hb 血症の持続と，それに対して週6,000単位以上を必要とするエリスロポエチンへの低反応性が，CVD の有意なリスク因子であることが示された．さらに，これらの因子と，その他の主な背景因子のうち単変量解析で CVD に有意だったものについて，多変量解析を行った結果，喫煙，虚血性心疾患の既往，高 Ca 血症が，貧血の影響を凌いで予後に強い影響を与えていることが明らかになった．このことから，適正ヘモグロビン値の早期達成およびその維持とともに，このようなリスクの予防が，透析患者の予後改善のために必要と考えられた．

検索用語：維持血液透析，ヘモグロビン，エリスロポエチン，喫煙，高カルシウム血症，心血管疾患死